



Title	主題の省略と顕現から見た文連鎖の型 : 文類型との 相関という観点からの考察
Author(s)	清水, 佳子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1995, 29, p. 17-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56529
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

主題の省略と顕現から見た文連鎖の型

—文類型との相関という観点からの考察—

清水佳子

1 はじめに

テキストにおいて先行文脈中に主題候補となり得る指示対象が2つ以上存在する場合は、どちらが主題として選択されるかを明示するために原則的には主題を顕現しなければならない。また、先行文脈中に主題候補（主題、あるいは主格）が1つしか存在しない場合は指示対象の同定に何ら支障がなく、主題を省略することは無標であると考えられる。久野暲（1978）の「省略の主目的は、（中略）聞き手にとって自明のインフォメーションを省くことによって、文の冗長度を下げることであろう。」という記述を文連鎖における主題の機能に当てはめて言えば、主題省略の主目的は反復主題の冗長度を下げることであるということになるが、反復主題を顕現することが文連鎖において常に冗長性をもたらすというわけではない。確かに省略されている主題を復元すると冗長性が感じられることが多いが、実際には反復主題が顕現している場合に冗長性が感じられることは少ないのである。

本稿ではこのような反復主題の顕現現象に着目し、同じ環境下にある省略現象との機能の異なりを記述することを試みる。以下、2章では従来の研究との関わりについて述べ、3章では「叙述の類型」によって文連鎖を分類する。最後に4章で主題の省略現象と顕現現象の異なりについて文類型との相関という観点から分析を行う。

2 従来の研究との関わり

従来の研究において主題の省略現象について言及したものは三上章(1960)の「(ハの)ピリオド越え」を初めいくつか存在するが、本稿で言う反復主題の顕現現象について扱った研究としては砂川有里子(1990)の「主題の省略と非省略」¹⁾が挙げられる。砂川は分析資料を小説に限定し、談話内に境界が設定される場合として「他の登場人物の介在」、「脈絡の不整合」、「時空間的なギャップ」、「語り様式の変化」、「書き手の視点の変化」などを挙げており、これらが原因となってそれ以前の主題を維持することが困難になったときに再び主題を設定しなおす必要が生じるという考察を行っている。談話に境界を設定するというこれらの文章論的な要因は小説を資料としているためにより一層複雑な様相を呈しているものと考えられるため、本稿では分析資料を評論や随筆、新聞に絞って考察するものとする。

3 「叙述の種類」による文連鎖の分類

文は連鎖することによってある事柄を論理的、時間的、空間的に展開させながら述べていくことができる。この文連鎖において文レベルの命題の意味的タイプの果たす本質的な機能を仮に叙述と呼ぶとすれば、叙述を行う文は一般に動詞文と名詞文に大別することが可能であろう (cf. 佐久間鼎(1941)「物語り文と品定め文」、三上章(1970)「動詞文と名詞文」)。叙述におけるこの形式的な2分類を文の命題レベルにおいて意味的に抽象化した記述としては寺村秀夫((1982)「動的対象と性状規定」)や益岡隆志((1987)「事象叙述と属性叙述」)等がある。本稿では意味的に抽象化した記述の方がより正確に叙述の異なりを反映していると考え、また、叙述の異なりが文連鎖における主題の省略と顕現の分析に有効である

と考えることから益岡の「叙述の類型」を援用して文連鎖の分類を行う。

益岡によれば「叙述」とは「現実世界を対象として表現者がおこなう概念化」であり、「属性」と「事象」という、性格を異にする2つの基本的な類型を認めることができるという。益岡の言う「属性叙述」とは「現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取り上げ、それが有する何らかの属性を述べる」もので、「事象叙述」とは「現実世界の或る時空間に実現・存在する事象（出来事や静的事態）」を叙述するものである。

具体的には各々の叙述文は次のような文である。

属性叙述文：典型的には名詞述語文

属性形容詞述語文

動詞述語文では「所有」、「能力」、「関係」を表すもの

テンス・アスペクト的に動作性を失い属性叙述文に近づくもの²⁾

事象叙述文：典型的には動詞述語文

感情形容詞述語文

事象を表す名詞述語文

以上簡略に引用した叙述の2つの類型を用いて文連鎖を次の5つの型に分類する（組み合わせとしては4種類）。

(A) 事象叙述文→事象叙述文

- (1) マルクは昨日買い物に出かけた。{彼は/ ϕ ³⁾} お気に入りのデザイナーのジャケットを買った。

(B) 属性叙述文→属性叙述文

- (2) マルクはフランスから来た留学生である。{彼は/ ϕ } テキスタイルデザインが専門である。

(C) 属性叙述文→事象叙述文

- (3) マルクはフランスから来た留学生である。{彼は/ ϕ } 昨日買い物に出かけた。

(D I) 事象叙述文→属性叙述文

- (4) マルクは昨日ファッション・ショーに出かけた。{彼は/^{#4}φ}
デザイナーの卵である。

(D II) 事象叙述文→属性叙述文

- (5) マルクは来る日も来る日もデザイン画を描き続けた。{彼は/^{!5}φ}
とても粘り強い男である。

(A)～(C)型の文連鎖では主題省略が自然に行われるのに対し、(D I)型の文連鎖では主題を省略すると文と文のつながりが悪く感じられ、主題が顕現している方が自然に感じられる。また、(D II)型においては主題を顕現する場合と省略する場合とは意味解釈が異なる。文類型の組み合わせが異なることによって何故このような解釈の違いが生じるのか、(A)(B)については4-1で、(C)(D I)(D II)については4-2で考察を行う。

4 文類型による主題の省略と顕現

4-1 類型の同じ文連鎖

3で分類した(A)事象叙述文→事象叙述文と(B)属性叙述文→属性叙述文の文連鎖は両者とも文類型が同じであり、各連鎖において質的な変化がないため結束性⁶⁾が強く、基本的には主題が省略されることが多い。1文が長くなったりした場合は次の文との間隔が大きくなるため主題の同定が困難になるため主題が顕現することもある。

まず、(A)型は一つの事柄や事件が時間的、空間的に展開する、あるいは因果関係をもって展開していく過程を表し、最も主題省略が行われる文連鎖である。

- (6) ある日、フィスターは⁷⁾、教室で「罪はなんじの門にあり」というテキストについて説いていたとき、精神分析の実験をしてみよう

と考えた。 ϕ^8 その生徒のそばで、なにげなく、うそ、詐欺、盗みの三つの誘惑について話した。(スト)

(7) 毛沢東は平癒を祈って、衡山にある南大廟に参詣した。 ϕ 約五十キロ離れた南岳まで、「南岳聖帝、阿弥陀仏……」と唱えながら、十歩あるいては南岳の方向にむかって跪き、礼拝することをくりかえした。(毛沢)

次に、(B)型は一つの主題の属性について2文以上にわたって述べるものである。主題省略の多い(A)型と比べ、主題が省略される場合と顕現する場合とがあるが、同一表現の主題が顕現する例はあまりなく⁹⁾、反復主題は指示詞や連体修飾を伴ったり、代名詞化される例¹⁰⁾が多い。

(8) 副腎は腎臓の上の内側にあって三日月型をした小さい器官(五〜七グラム)で、生きてゆくために欠くことができぬ(両側を摘出すると5日ほどで死ぬ)、ホルモンを分泌する臓器である。それは二つの違った内分泌腺からできている。(スト)

(9) 「らくがき」は語る「おしゃべり」でなく、書く「おしゃべり」である。それは、語る「おしゃべり」と同様のもので、同じようにストレスの解消に役立つ。(スト)

また、属性と事象という2つの類型は明確に二分できるものではなく、連続性をなすものであると考えられるが、中間的な(事象叙述文に近づいていく)属性叙述文の連鎖については主題が省略されやすいという傾向が見られる。

(10) 固体中の原子は、自分のまわりに並んでいる他の原子のために、かなり強く拘束されている。 ϕ 数オングストロームの範囲でしか動けない。(不確)

(11) とにかく、①のケースで考えた透明人間は、②のような忍術使いではないから、だいぶんリアルである。φ自分の姿は見えないのだから、憎いやつの頭をポカリとやることも可能である。 (不確)

4-2 種類の異なる文連鎖

種類の異なる文連鎖には(C)属性叙述文→事象叙述文と(D I)事象叙述文→属性叙述文とがあるが((D II)については後述)、(C)では主題が省略されることが多く、(D I)では主題が顕現する傾向があるという違いが見られる。どちらも質的に異なる文の連鎖であるのに、順序が入れ替わるとなぜこのように現象に違いが生じるのであろうか。各々の型の特性について明らかにしたい。

4-2-1 属性叙述文→事象叙述文(連鎖)

まず、(C)型の文連鎖についてであるが、1文目の属性叙述文は文連鎖において、要素の導入・設定という役割を果たす。そして2文目以降の事象叙述文は先に設定された属性を帯びた主題が動き、あるいは状態の変化を起こしていくという展開の機能を果たしていると考えられる。文類型は質的に異なっているが、属性叙述文から事象叙述文への連鎖は物事の展開の在り方として自然な流れであり、結束性も強く、主題は省略されやすくなる。

具体的なデータとしては、評論4冊、随筆3冊、天声人語1年分中で、(C)型の文連鎖において2文目(以降)の事象叙述文が略題になる例は30例、顕題になる例は7例であった。要素の導入・設定の機能を果たす属性叙述文はほぼ1文で現れ(2文にわたるものは3例のみ)、後続する事象叙述文は1文のこともあれば10文程に及ぶものもあった。このことから、先行する属性叙述文は基本的には1文で要素の導入を果たし、その後の事

象の展開は自由であるということがわかる。この型の文連鎖はテキストの冒頭部に現れることが多い。

(12) 藤十郎は元禄時代の名優で、色白の美男子だ。φ近松の芝居で、人妻に恋する男の役を演じるにあたり、人妻のお棍にちょっかいを出した。 (大恋)

(13) ペイトン・ファーカーは南部の農園主だから奴隷所有者であり、当然のことながら南軍方である。φ戦闘に参加できなかったことにいらしながら、それでもいつかは軍隊に入って勲功をたてようと、その機会をうかがっていた。 (短篇)

4-2-2 事象叙述文(連鎖)→属性叙述文: 顕題

次に、(D I)型の文連鎖では先行する事象叙述文は1文のこともあれば複数文にわたる場合もあるが、後続の属性叙述文は基本的には1文である。事象叙述文の機能は(A)型や(C)型と変わらないが、属性叙述文の機能は(C)型とは異なる。(D I)型の属性叙述文はもはや要素の導入・設定といった機能を果たしてはおらず、文連鎖の中では事象の主題に関してその属性の説明を挿入するという役割を果たす。この際、後続する属性叙述文において主題は省略されにくく顕現することが多いという事実は言語直感によって保証される。(D I)型の文連鎖において主題の省略か顕現かを選ばせるアンケートでは顕題の属性叙述文が多く選ばれるという結果がでている(アンケートを行った例文については以下その結果を明記する)。2文目(以降)が略題文となる場合、略題文は先行する主題の傘下に入りいわば従属的に存在する。しかし(D I)のように顕題文となる場合、属性叙述文はかならずしも事象叙述文とは関連性を有する必要がなく、先行文とは並列的に存在すると言える。

(14) 一八七一年、アンブロウズ・ビアスは二十九歳で結婚し、やがて子供も三人できた。φロンドンに渡って新聞雑誌に文章を発表し、作品集も三冊出し、またサン・フランシスコに帰って週刊誌『アーゴノート』、次に週刊評論誌『ウォズプ』のそれぞれ編集を任せられ、そのうちまだ若かった頃の新聞王ハーストと知り合って『エグザミナー』紙に執筆を依頼された。①彼は (②φ) ペン一本で人を殺すことができた。「サン・フランシスコの極悪人」と呼ばれるほどその筆鋒は鋭く、彼のペン先にかかった者は政治家、実業家、宗教家、官吏、教育者、文筆業者、そして女性一般である。 (短篇)

[アンケート¹¹⁾ 結果：①30名／②0名 (総数30名)]

(15) 産業革命が恐ろしい勢いで緑を破壊していった当時の英国にあって、ハドソンはリマに思いを託し、リマの死を描くことで自然破壊の残酷さを告発した。①ハドソンは (②φ) 生涯、鳥と緑と草原の風を愛した人だった。 (天声)

[アンケート結果：①19名／②3名／両方3名 (総数25名)]

(16) 岩田さんは子どものころからバラが大好きで、部屋にバラを飾るのがなによりの楽しみなのに、その楽しみが近ごろ薄れてきたといっていた。この人は生まれつき全盲である。 (天声)

(17) しかし、その頃、私は¹²⁾、デビューしてから三冊目の小説「偽りのマリリン・モンロー」を書いていたので、難しいです、と言った。私は、二つの小説を、同時に書けない。φ小説に私自身が入り込み、主人公の気持ちになりることができないからだ。 (別れ)

先述と同様のデータによれば、(D)型 ((D I)、(D II)を含める) の連鎖において属性叙述文が頭題となる例は17例、略題となる例は11例であり、先行する事象叙述文は必ずしも1文ではなく複数連鎖する場合もあるが、

属性叙述文はすべて1文で終わっている。その後さらに属性叙述文を詳述する内容の文、または「のだ」文が続くことがある。最も多いのは事象叙述文から属性叙述文+説明のモダリティ（ノダ、ワケダ）において主題が省略されるというパターン（18例）であるが、主題省略と「のだ」文の関係については4-2-3-2で述べることにする。

これらのデータから言えることは(D)型の文連鎖は、属性叙述文だけでテキストを終結するには不安定であり、説明のモダリティを必要とすることが多いということである。先程述べた(D)型の属性叙述文はかならずしも事象叙述文とは関連性を有さず、並列的に存在するという考察からすると、属性叙述文は事象叙述文の傘下に入ることがないため、その関連性を明示したい場合には説明のモダリティ等の他の表現を伴う必要があると言える。

4-2-3 事象叙述文（連鎖）→属性叙述文：略題

4-2-3-1 評価という関連性が読み取れる場合

4-2-2では(D I)型の事象叙述文から属性叙述文への文連鎖において主題が顕現する傾向があることについて考察した。(D I)と同じ事象叙述文から属性叙述文への文連鎖であっても事象から判断し、筆者がその主体に対し属性に関する評価を下すという関係が読み取れる場合には主題省略が可能になる((D II)型)。次のような例では主題が省略される場合と顕現する場合とがあり、主題が省略された場合と顕現する場合とでは解釈が異なる。

(18) カツオはお父さんが大切にしていた盆栽を割ってしまった。

{ I カツオは / II ϕ } そそっかしい子供だ。

(18)の例ではIを選択するかIIを選択するかによって解釈が異なる。I

(顯題)を選択した場合、事象叙述文と属性叙述文の2つの文の関係は並列的な読みも出てくる。つまり、カツオが盆栽を割ったという事態とは別に、カツオはもともとそそっかしい性質の持ち主であるという解釈がなされる。また、Ⅱを選択した場合はカツオが盆栽を割ったという事象から盆栽を割ったカツオはそそっかしい子供であるという評価を下しているという解釈がなされ、事象叙述文が属性叙述文に対し従属的になる。事象叙述文から属性叙述文という異なる種類の文連鎖であっても主題が省略されるのは、このように2つの型の間筆者の評価という積極的な関係が見られ、その構造が従属的になる場合である。

以下、主題が省略されている評価的な文連鎖の例を挙げる。

(19) 死を待つ子供たちの中において、10人の医者、看護婦は1日12時間、2交替制で実にきびきびと働いていた。φ頼もしい存在だった。

(天声)

(20) 「(省略)」と、和田さんは池袋サンシャインシティ五十階にある自分の部屋で陽気に笑った。φあけすけで、何でもそのまま言ってしまうというところが取引先や部下などに人気がある。(いま)

4-2-3-2 名詞文における主題省略

4-2-2で事象叙述文から属性叙述文の連鎖では主題が顕現する傾向があるが、属性叙述文に説明のモダリティである「のだ」や「わけだ」が付加された場合、主題が省略される例が多いということに触れた。すべての組み合わせの文連鎖において説明のモダリティを有する文は略題になりやすいという傾向がある。説明のモダリティは先行する文との関係を明示するマーカーであり、テキストにおいて結束性をもたらす表現である(cf. 霜崎實(1981))ため、説明のモダリティを有する文では主題は省略されやすくなるのである。説明のモダリティの中で最も多用される「のだ」文

は、準体機能をもつ「の」によってその前の部分を名詞化する文であり、名詞文と共通性をもっている。「のだ」文において主題が省略されやすいという現象は、名詞文（特に文末が「人」などの形式名詞で終わる文）においても起こり得る現象である。名詞文は先行文に対し「のだ」文ほどの結束性をもたない。動詞・形容詞文と「のだ」文との中間的存在である。

(18) カツオはお父さんが大切にしていた盆栽を割ってしまった。

{ I カツオは / II ϕ } そそっかしい子供だ。

(18)' カツオはお父さんが大切にしていた盆栽を割ってしまった。

{ I カツオは / II # ϕ } とてもそそっかしい。

(18)の例は属性叙述文が名詞文になっており、略題と顕題の両方の解釈が可能な例であるが、(18)'の形容詞文に変えると結束性という点で略題の解釈が困難になる。

次の(21)～(23)は事象叙述文から属性叙述文への連鎖であるが、属性叙述文はすべて名詞文であり主題が省略されている例である。

(21) 約二十年、愛生園の所長を務めた高島重孝さんは、この人間解放のための橋を実現する運動の先頭に立っていたが、橋の姿をみることなく、二十三日に亡くなった。 ϕ 生涯をハンセン病患者の救済に費やし、後輩から「大奇人」と呼ばれて慕われた人だった。 (天声)

(22) 大阪から、自ら「樹医」を名乗る山野忠彦さんが呼ばれた。 ϕ 84歳、これまでに900本近い古木、名木をよみがえらせたという人である。 (天声)

(23) 「基地の島」は変わらず、本土日本人の道義的責任の念がうせてゆく流れの中で、中野さんは世を去った。 ϕ 八十一歳だった。

(天声)

5 まとめ

本稿では同一指示の主題を有する文が連鎖する場合、主題が省略される場合と顕現する場合とがあることに着目し、益岡の「叙述の種類」という文類型を用いて文連鎖を分類し、それぞれの型について考察を行い、

- (A) 事象叙述文→事象叙述／略題が多い。
- (B) 属性叙述文→属性叙述文／略題と顕題の両方の場合がある。
- (C) 属性叙述文→事象叙述文／略題が多い。
- (D I) 事象叙述文→属性叙述文／顕題が多い。略題は(D II)に記述。
- (D II) 事象叙述文→属性叙述文／略題になる場合は評価的な関連性
が読み取れる場合と属性叙述文が名詞文の場合。

という観察を得た。今後はさらに用例数を増やし、これらの文連鎖の型の違いについて考察を深めていきたい。

注

- 1) 砂川の用いる「非省略」という用語は「省略できるにも関わらず省略しない場合」を指し、「省略すると主題が読み取れなくなるために明示的に言及しなければならない場合」は「主題の義務的な明示」と呼んでいる。本稿で用いる「主題の顕現」は主題の義務的な提示と恣意的な提示の両方を含んだ表現であり、主題の明示が義務的であるか恣意的であるか必ずしも明確に二分されるものではないと考える。しかし実例において全く恣意的な主題の顕現は少数であることから、主題の顕現の多くはそれなりの意義を有していると言える。
- 2) この部分(テンス・アスペクト的に……)は益岡(1987)には取り上げられていない。本稿で新たに加筆した。
- 3) 省略可能であることを表す記号。
- 4) 省略するとつながり(結束性)が悪く感じられることを表す記号。
- 5) もう一方の選択肢とは意味解釈が異なることを表す記号。
- 6) 本稿では結束性(Cohesion)を「ある言語表現(ゼロ形態も含む)が一文
中、もしくはその前後に存在する文あるいは文の一部にその解釈を依存す

ることによって生じる意味的なつながり」と定義する。cf. 庵功雄(1995), Halliday & Hasan (1976)

- 7) 主題部に論者が下線を施した。以下の事例に関しても同様。
- 8) 同一指示の主題が省略されていることを表すため論者が加筆した。以下の事例に関しても同様。
- 9) あるとしても、ある種の文学的な表現効果を狙ったものである。
- 10) 2文目以降の主題がどのような形で現れることが多いかについては今後の課題である。cf. Hinds, J. (1983)
- 11) 大阪大学文学部日本学科言語系の学生に2回にわたって実施した。
- 12) 1/2人称は場面依存性が強く文脈を与えられていない始発の文においても主題が省略されることが多い。(Halliday & Hasan (1976 : p. 48) の「外界照応 (exophoric)」にあたる。) 特に随筆では1人称主題は頻繁に省略されるがこの例では顕題になっている。

参考文献

- 庵 功雄(1995)「テキストの意味の付与について — 文脈指示における「この」と「その」の使い分けを中心に —」『日本学報』14大阪大学
- 久野 暉(1978)『談話の文法』大修館書店
- 佐久間鼎(1941)『日本語の特質』育英書院
- 霜崎 實(1981)「[「ノデアル」考 — テキストにおける結束性の考察 —」
Sophia Linguistica 7 上智大学
- 砂川有里子(1990)「主題の省略と非省略」『文藝言語研究 言語篇18』筑波大学
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 野田春美(1994)「の(だ)の機能 — 名詞文との共通性を中心に —」大阪大学文学研究科 未公刊博士論文
- 畠 弘巳(1980)「文とは何か — 主題の省略とその働き —」『日本語教育』41
- 益岡隆志(1987)『命題の文法 — 日本語文法序説 —』くろしお出版
- (1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 三上 章(1970)『文法小論集』くろしお出版
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976) *Cohesion in English* Longman
- Hinds, J. (1983) "Topic continuity in Japanese [1]", in Givón, T. (ed.) *Topic Continuity in Discourse* Typological Studies in Language, vol. 3,

Amsterdam: J. Benjamins (in press)

用例出典

(天声): 天声人語／朝日新聞 (短篇): 筒井康隆『短篇小説講義』 (スト): 宮城音弥『ストレス』 (不確): 都築卓司『不確定性原理』 (毛沢): 竹内実『毛沢東』 (大恋): 風間研『大恋愛』 (別れ): 松本侑子 (いま): 椎名誠『いまこの人が好きだ!』

(大学院後期課程学生)